

# 砂浪 朗読用

monobe0329

## 01 砂浪

---

男性の朗読を想定して書いた小説です。

「砂浪」

遙かな昔、砂の民族、砂の民と噂される人たちがいた。

いま、私は彼らの道を辿り、取り残された子供のように、この砂漠に立ちつくしている。

皮膚の焼ける感触、靴の底からも砂の熱さが伝わってくる。サングラス越しに空を見上げる。ほんの少しサングラスをずらせば。目に突き刺さるのはまさしくの青だ。

そうだ、青い空だ。あれは、学生時代の夏、暑い昼下がりのことだった。

蝉の声、油蝉の唸る音。木漏れ日の並木道を歩く。アカシアの薄い葉が日差しを緑に染める。歩きつづけ、古びた図書館、涼を求めるように私は埃っぽさとその薄暗がりの中へと入り込んでいった。

もともと、さして本を読む質ではない。いたずらに背表紙を眺めて廻る。

私にとって、微かに木の床がきしむ書架に囲まれたこの空間は、未知の世界に他ならない。

薄暗がりの所為だろうか、ひたすら奥へと続く本の背表紙、果てなく何処までも続いていく。

一步、足を踏み出す度に一つの世界を、一步、足を踏み出す度に一つの歴史を私は通り過ぎていく。

声が・・・。

いったい何処からだろう、ほんの一瞬、子供達のはしゃぐ声が聞こえた、いや、こんな薄暗い図書館の・・・、暑さに疲れているのか・・・

少し座ろう・・・

何気なく、私は書架から一冊の本を抜き出し、机へと向かった。

ひたすらに続く砂漠、限りのない広がりだ。

砂漠は空の青の広がりを映し込む。砂漠は砂の空だ。私は空の中にいる。

何一つとして目印のない、建物があるわけでもなく、オアシスが見えるわけでもない。でも、私は確信している。もう少し、もう少しで辿り着くことができるのだと。

手ぶらで机につくのもなんだかと、何気なく書架から抜きだした一冊の本。

これはシルクロード調査隊の残した記録だった。

ゆっくりとページを繰る指先が止まる。小さな写真だ。砂漠の風景が微分化され、小さな黒の点でこの本に移し込まれている。そして、この風景こそが、約束を・・・、この砂漠に私がやって来た理由となるものだった。

蜃気楼・・・、地平の彼方に揺らめく何かが見える。

揺らめく所為で、それがどんな姿を光が演じようとしているのか、わからない。無数の巨人達がやって来るようにも見えるし、また、遙かに望む巨大な建造物のようにも思える。

かの地では人はまだ住んでいるのだろうか。生活を、営みを続けているのだろうか。

遙かな昔、この地はこんな砂漠などではなかった。オアシスの、たゆとうたる湖、賑わう街があった。交易の要所として栄えた街だった。

立ち止まり、見知らぬ言葉を私は話している。不思議と意味が分かる。誰に話しかけているのだろうか。私の横に誰かがいる。遠い記憶。やわらかな指先がそっと私の指を絡める。そして、ほんの少しの未来、ほんのささやかな希望を語り合う。誰と……。このやわらかな指先は誰だろう。とても儚くて哀しい。少しでも力を入れれば、この指先はふっと消えてしまうかもしれない。声だ……。子供たちのはしゃぐ声が聞こえる。何処から……。

風紋、風が砂漠に規則正しい模様を描く。

そうか……。少し日が傾きだした所為だ、風紋のグラデーションが際だち浮かび上がる、これは砂漠の年輪だ。何処までも何処までも続いている。

一つ一つの光と陰の連なりが、砂漠の見てきた、人の営みも、なにもかもを樹木の年輪のように、その陰に移し込んでいる。

子供の頃、不思議に思ったことがある。どんなに大切なことでも思い出せないことがある。どうして思い出せないのだろうか、ととても、大切な約束なのに。そして、ある時、気がついた。思い出せないのは、きっと、記憶を落としてしまったからだ。落としてしまった記憶は陰に吸い込まれてしまう、でも、消えるのじゃない、陰の中にうずたかく蓄えられていくんだ。たくさんの記憶や、大切な思いがひっそりと蓄えられていく。

それなら、どうなんだろう。この光と陰のグラデーションを一步、一步、越えていけば、落としてしまった記憶たちが私を待っていてくれるのではないだろうか。

空の青が少しずつ薄れ、紫帯びた赤に変わる。頬に感じる風がほんの少し涼しくなった。今更に、なんて静かなんだろうと思う。音……。風の音と砂を踏む足音だけが、少なくとも私がこうして歩いていることを実感させてくれている。少し立ち止まって、空を見上げる。空はいつの間にか赤く赤く紅蓮に燃えている。複雑な炎の色だ。空が、空そのものが燃えているようだ。五十六億年後に現れるという弥勒菩薩の見る風景はこれと同じかもしれない。

視線を落とせば、砂漠一面が赤く染まっていた。砂一粒一粒が赤く色づいてる。砂漠は砂の空、ならば、私は夕暮れの空を歩いている。そうだ、遙かな昔、湖が消え、オアシスが消えて、街を失った砂の民もこの砂漠をさまよい歩いた。いったいどれほどの思いで住み慣れた地を離れ、この砂漠をさまよったのだろうか。たくさんのものを失い、儚き未来の幸せだけをよりどころに歩きつづけたのだろうか。

私は……。いったいどんな気持ちでいたのだろうか。

声だ……。一瞬、子供たちのはしゃぐ声が聞こえた。どうしてだろう、不思議と懐かしい。とても、懐かしくて、懐かしくて仕方がない。とても大切な大切な記憶。歩くことで、落としてしまった記憶たちが私の元へと帰ってきてくれているのだろうか。

空は燃え尽き、虚空に白い月が浮かびあがる。風が緩やかになり、そして凧いでいく。月の明かりが砂漠を白く照らし出して。白い光に呼応して砂の一粒一粒が水晶の粉のように輝き出す。ここまで歩いてきた。そして、たくさんのこと、無くしてしまっていた記憶を拾い上げてきた。

そうだ、ここだった。ここだったよね。気がつけば姿の見えぬ同伴者。私の横を歩いていた。月の明かりの、その中でその存在は確かな存在として蘇る。

立ち止まる、そうだったよ、ここだったんだ。

白く輝く砂の一粒一粒から蓄えられた記憶が光とともに浮かび上がる。

光がその速度を停止させ、霧のように漂う。

そして少しずつ光の霧は形を生み出していく。

人の生きていた街を生み出す、白い光のオアシスだ、光の湖が街を生み出していく。そうだ、白く輝く砂漠が、その輝きに湖へと生まれ変わろうとしているんだ。

声だ・・・、子供たちの声が聞こえる。

目の前で光の霧が子供たちの姿に生まれ変わる。遊び、鬼ごっこだろうか。光の子供たちが光の街を駆けめぐる。なんて、賑やかなんだ。

絡める指先、暖かい・・・

未来、いつの日か生まれ変わり、また、もう一度、君と出会おうと約束した。いま、その約束をしたときの君とこうして指を絡めている。

どうなんだろう、君はいま生まれ変わり、私を探してくれているのだろうか。これから私は君を探し見いだすことが出来るのだろうか。

月が沈み朝がくれば、また、私は独りだ。

そっと振り返り、光の君を見つめる。少し恥ずかしそうに笑みを浮かべる君。

これから君を探しに行くよ。